

「災害を伝える」というコミュニケーション過程に関する研究
A study on the communication process of “passing down disaster experiences”

多田 健太

Kenta TADA

内田 充紀

Mitsuki UCHIDA

関谷 直也

Naoya SEKIYA

目 次

1. はじめに

1.1 背景と目的

1.2 調査の概要

2. 調査結果

2.1 対象者の概要

2.2 災害伝承施設への訪問による効果

2.3 災害伝承施設への訪問経験の記憶

2.4 訪問経験を他人に伝承するか

3. まとめ

引用・参考文献

付属資料（アンケート調査の単純集計）

キーワード：災害伝承、震災伝承、コミュニケーション、行動変容

執筆分担：

多田 健太 東京大学大学院学際情報学府 1～3 章

内田 充紀 元東京大学大学院学際情報学府

関谷 直也 東京大学大学院情報学環 総合防災情報研究センター

1. はじめに

1.1 背景と目的

2011 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震からまもなく 14 年が経つ。この未曾有の大災害は、日本での観測史上最大のマグニチュード 9.0 が計測され、死者 19,747 人・行方不明者 2,556 人、住宅被害 1,154,893 棟を記録し、甚大な被害をもたらした（国土交通省, 2021）。それから 14 年が経過し、震災を経験していない世代が中高生になる中で、災害の経験や教訓を次代に受け継いでいく伝承行為が改めて着目されつつある。そういった伝承行為は、「震災伝承」「災害伝承」（以後災害伝承）と称され、災害を直接経験していない人であっても、災害の教訓に触れることで、防災意識の向上と災害への備えにつながる（総務省, 2024）とされている。このことから、東北地方太平洋沖地震で甚大な被害を受けた、青森県から福島県の各地で特に活発に行われている。

災害伝承という行為自体は、今に始まったものではない。古くから繰り返し災害を経験してきた我が国では、各地で災害の経験や教訓の伝承が行われてきた。災害伝承普及協会によると、災害伝承のタイプは大きく 3 つあり、記録や石碑などの「文字による伝承」、民話やことわざなどの「口承による伝承」、災害遺構などの「物質的な伝承」に大別されるという（災害伝承普及協会, n. d.）。例えば、明治三陸地震や昭和三陸地震による津波で甚大な被害を経験し、「高き住居は児孫の和楽、想へ惨禍の大津波、此处より下に家を建てるな」の石碑を建てた岩手県宮古市の重茂姉吉地区（宮古市災害資料アーカイブ, n. d.）。安政南海地震による津波の際、稲束に火をつけて津波からの避難を促したとされる、和歌山県広川町の「稲むらの火」（内閣府, 2005）。こういった事例に代表されるように、過去の災害の教訓は文字、口承、そして遺構といった形で残され、今に受け継がれている。そして災害伝承という行為により、「津波てんでんこ」により命が助かった「釜石の出来事」のように、地域住民の防災意識を高め、結果的に命が救われた事例も、東北地方太平洋沖地震では起きており、災害伝承の重要性が認識されている。

このような事例も踏まえ、東北地方では震災の教訓を地域内外にそして後世に伝えていこうと、震災伝承施設が延べ 344 施設（3.11 伝承ロード推進機構, 2024）整備されている。こういった施設には、実際に地域外からの訪問者も訪れており、「ホープツーリズム」の一環として中高生の教育旅行にも活発な利用がされている。その中で、災害伝承施設を訪れ災害伝承の受け手となる人が、必ずしも防災に興味を持っているわけではない、という課題もあり、より効果的な災害伝承の姿が求められている。

加えて、「公助の限界」（内閣府, 2014）が唱えられるようになり、自助や共助といった、行政に頼りすぎずに各々が防災意識を高く持つことが求められるようになった。そういった潮流の中で、防災へ興味を持っていない人も災害の教訓に触れることができ、防災意識を高めることにつながる、災害伝承の果たせる効果は大きい。

しかし、防災への興味の有無により、災害伝承の効果がどう違うか、についての知見は未だ不足している。本研究では興味の有無の差により、災害伝承による態度変容や行動変容には差があるのか、というところを明らかにしていく。

1.2 調査の概要

本調査では、防災への興味の有無の差により、災害伝承施設の訪問により受ける効果に差があるのかを明らかにする調査を行う。

2023年12月25日から28日までを期間とし、楽天インサイト株式会社のインターネットモニターパネルを用いて実施する。全国の18歳から79歳を対象として、東北地方太平洋沖地震だけでなく、過去起こった災害に関する展示をしている災害伝承施設を訪問したことがある人を抽出する。災害伝承施設へ1度のみ訪問したことがある人500名と、5度以上訪問したことがある人500名の計1,000名をスクリーニング調査において抽出する。

なお前述の通り、災害伝承施設への訪問者には、教育旅行や友人・家族に連れられての訪問など、防災への興味が乏しい人も含まれるため、文字としての伝承や口承としての伝承による災害伝承については除外している。また防災への興味の有無について差を明確にするため、災害伝承施設訪問回数に着目し、1度のみ訪問者と5度以上の訪問者の2群の調査対象者を選定している。

ただし、うち20サンプルについては、後述する訪問した災害伝承施設の質問(表2.1.3)において、施設名及び地域名ともに「不明」「ない」との答えだったことから、特定の災害伝承施設への訪問経験が記憶されていないと判断し、無効回答とする。その20サンプルを除いた、980サンプルを有効回答とする。

以上を踏まえた調査概要は、以下の通りである。

表 1.2.1 調査概要

調査対象：楽天インサイト株式会社のパネル
調査方法：WEB調査（モニターパネル調査）
有効回答：980サンプル
有効回答サンプルの内訳： スクリーニング調査を行い、伝承施設への訪問経験者のみを抽出。抽出した1,000名から無効回答20名を省き、1度のみ訪問491名、5度以上訪問者489名の計980名を対象とした。
調査期間：2023年12月25日～12月28日

2. 調査結果

本章では、調査結果を示す。具体的には、対象者の概要（2.1）、訪問時の印象や訪問による効果（2.2）、訪問経験の記憶について（2.3）、訪問経験を他人に伝承するか（2.4）の4節に分け、それぞれの角度から研究を進めていく。

2.1 対象者の概要

本節では、調査対象者の概要をまとめる。

調査対象者の性別・年齢及び災害伝承施設への訪問回数を表2.1.1に記す。980サンプルのうち、男性が742名、女性が238名という結果になった。年代については、10代・20代が少なく、50代・60代が多い。

また災害伝承施設への訪問回数について聞いたところ、表右側の結果が得られた。対象者のうち、5度訪れた人が242人（24.7%）、6度が36人（3.7%）、7度が8人（0.8%）のように訪問回数が増えるにつれ、訪問者数が減少していく。また、10度以上訪れたことがあると答えた人が198人（20.2%）もあり、災害伝承施設訪問回数が極端に多い人の存在も本調査により確認された。

表 2.1.1 調査対象者の性別・年齢及び災害伝承施設の訪問回数（n=980）

概念	項目	度数（人）	割合	概念	項目	度数（人）	割合
性別	男性	742	75.7%	災害伝承 施設 の訪問回数	1回	491	50.1%
	女性	238	24.3%		5回以上	489	49.9%
年代	10代	2	0.2%		5回	242	24.7%
	20代	34	3.5%		6回	36	3.7%
	30代	105	10.7%		7回	8	0.8%
	40代	199	20.3%		8回	4	0.4%
	50代	293	29.9%		9回	1	0.1%
	60代	279	28.5%		10回以上	198	20.2%
	70代	68	6.9%				

また調査対象者の居住地については下表になる。国外を除く、47都道府県すべての居住者からの回答があった。それを、地方別にまとめ直したものが以下の通りである。関東（35.4%）、中部（13.6%）、関西（22.9%）と三代都市圏に集中しているが、他地方からも満遍なく回答が得られている。

表 2.1.2 調査対象者の居住地域 (n=980)

	人数(人)	割合
北海道	40	4.1%
東北	125	12.8%
関東	347	35.4%
中部	133	13.6%
関西	224	22.9%
中国	35	3.6%
四国	14	1.4%
九州	62	6.3%
国外	0	0.0%
計	980	100%

続いて、訪問した災害伝承施設について、「あなたがはじめて訪問した災害伝承施設の名称と場所をお答えください。」(問1)という文言とともに、名称と市町村を自由記述で聞いた。その回答をハザード別・災害別に集計し直した結果を表 2.1.3 に示す。例えば「東北地方太平洋沖地震」には東日本大震災・原子力災害伝承館などの、震災後に東北地方沿岸部に出来た施設を、「阪神・淡路大震災」には人と防災未来センターや野島断層保存館を分類している。なおその他には、特定のハザードが紐づいていると明瞭に推察できない施設(例：品川防災体験館、福岡防災センター)を分類している。

ハザード別に見ると、地震(73.7%)が最も多かったが、水害(2.0%)、火山噴火(5.8%)、そして戦災(8.0%)と、地震に限らない災害伝承施設への訪問が見て取れる。災害の種類別に見ると、東日本大震災(43.1%)、阪神淡路大震災(24.3%)、太平洋戦争(8.0%)と続き、施設として整備が十二分に行われている災害伝承施設への訪問が多い。

表 2.1.3 初めて訪問した災害伝承施設についてハザード別に整理 (n=980)

ハザード	災害	人数	割合	ハザード	災害	人数	割合
地震	東北地方太平洋沖地震	422	43.1%	噴火	雲仙普賢岳噴火	35	3.6%
	阪神・淡路大震災	238	24.3%		有珠山噴火	12	1.2%
	関東大震災	29	3.0%		ほか	10	1.0%
	新潟県中越沖地震	8	0.8%		計	57	5.8%
	熊本地震	7	0.7%	戦争	太平洋戦争	78	8.0%
	濃尾地震	6	0.6%		計	78	8.0%
	ほか	12	1.2%	その他		103	10.5%
	計	722	73.7%		計	980	
水害	伊勢湾台風	7	0.7%				
	ほか	13	1.3%				
	計	20	2.0%				

被災の経験の有無について、「あなたは今まで大きな災害を経験したことはありますか。それぞれについて、一つずつお答えください。」（問 17）という文言とともに、地震・津波・火山噴火・水害の 4 種のハザードを提示したところ、図 2.1.1 の結果を得た。地震や水害だけでなく、津波や火山噴火を経験したことがある人が含まれている点が特徴的である。津波については 10.3%の経験者、火山噴火については 16.3%の経験者が含まれていた。なお経験した災害の種類による差という面については、今後明らかにしていきたい。

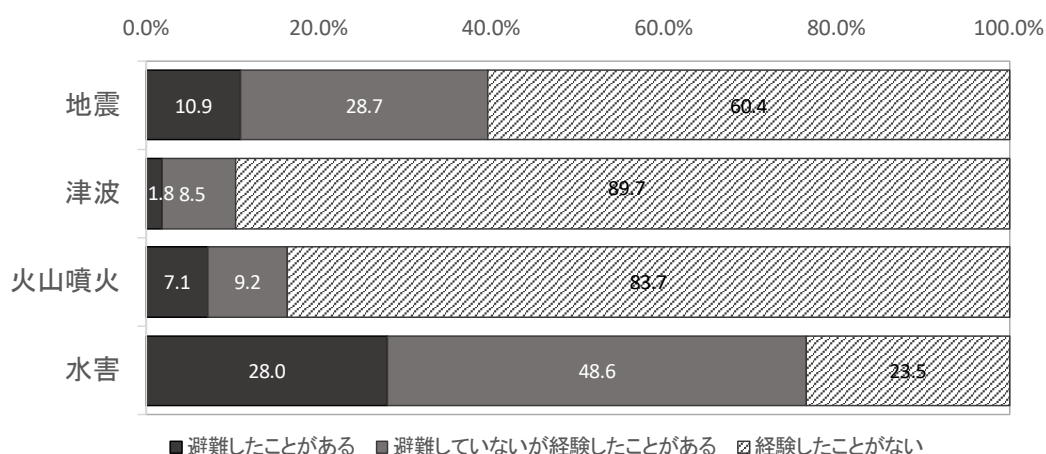


図 2.1.1 各ハザードについての、避難や経験の有無 (n=980)

災害伝承施設を訪れた理由について、「あなたが問 1 で答えた災害伝承施設へ訪問した理由は何ですか。それぞれあてはまるものを選んでください。」（問 2）と聞いた結果を図 2.1.2 に示す。図の通り、「防災に関心があったから」（58.3%）や「その施設がある地域に興味があったから」（55.7%）など、災害に関連する訪問理由については、半数以上が該当していることが示された。また、「学校行事（修学旅行、校外学習等）の行程だったから」（11.7%）「家族・友人に誘われたから」（24.0%）のような、必ずしも能動的な訪問理由ではない項目や、「博物館や美術館を訪問することが好きだから」（42.9%）のような災害とは全く異なる訪問理由の項目についても、一定の回答があった。このことは、防災への興味が薄い層であっても、災害伝承施設を訪問している実態を示している。

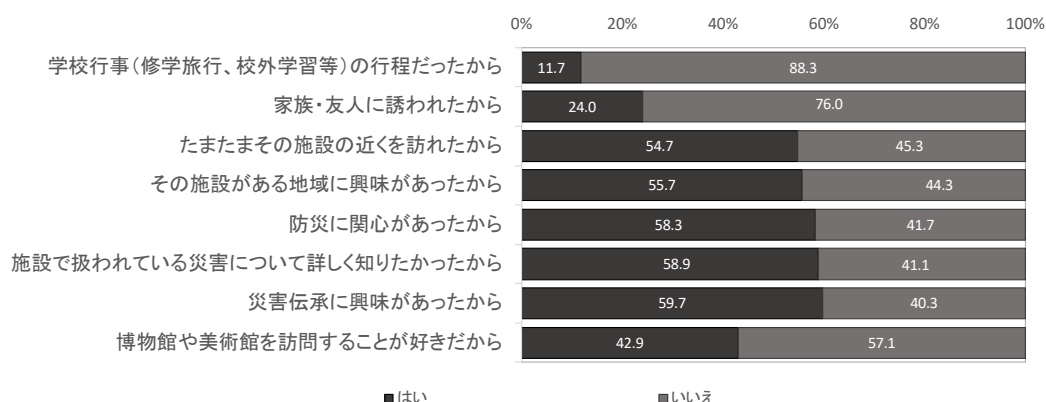


図 2.1.2 災害伝承施設を訪れた理由（複数選択、n=980）

この問 2（図 2.1.2）への回答において、「学校行事（修学旅行、校外学習等）の行程だったから」「家族・友人に誘われたから」「たまたまその施設の近くを訪れたから」「博物館や美術館を訪問することが好きだから」の 4 項目を災害に関連がない項目、「その施設がある地域に興味があったから」「防災に関心があったから」「施設で扱われている災害について詳しく知りたかったから」「災害伝承に興味があったから」の 4 項目を災害に関連する項目とみなした。そして、災害に関連する 4 項目のどれか一つに「はい」と回答した人を、本研究では防災に興味がある層と定義した。一方、災害に関連する 4 項目全てに「いいえ」と回答した人を、本研究においては防災に興味がない層と定義した。この定義を踏まえ分布を確認したところ、図 2.1.3 の結果を得た。前述の通り、防災への興味がない層（22.2%）であっても災害伝承施設を訪問している事実を示すことができた。本定義を以後の分析において使用し、防災への興味の有無の差に着目して分析していく。

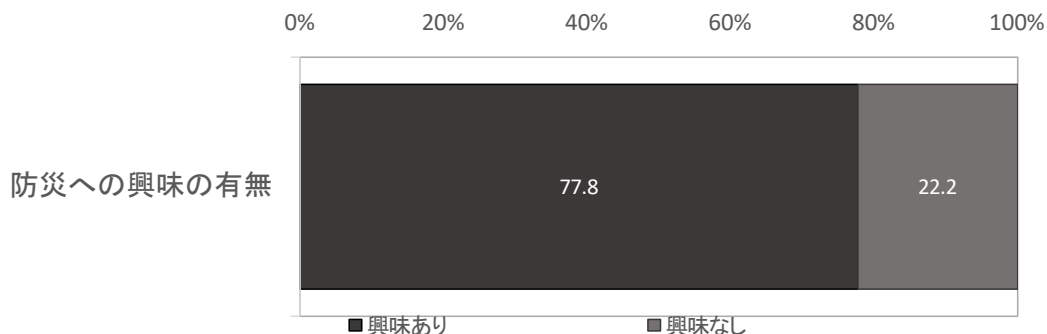


図 2.1.3 防災への興味の有無（n=980）

2.2 災害伝承施設への訪問による効果

本節では、訪問時の印象や訪問による効果について、防災への興味の有無に着目しながら分析していく。

まず、災害伝承施設に訪問して印象に残っているものを聞いた。「あなたが問1で答えた災害伝承施設へ訪問して見たものや聞いたもののうち、以下のものはどれくらい印象に残っていますか。最も近いものを選んでください。」(問3)と聞き、それぞれについて、「非常に残っている」～「全く印象に残っていない」の4件法及び、「展示されていなかった」「開催されていなかった」の計6つの選択肢から1つ回答してもらった。結果図2.2.1を得た。なお、訪問時に展示や開催がそもそも行われていない場合については、集計から外したため、項目ごとにサンプルに差がある。

結果として、すべての項目において、印象に残っていることには有意差が見られた(以下、サンプルサイズに差があるが、参考までに二つの変数間に関連がないかを調べる χ^2 検定の結果を基に論じていく)。概して、防災への興味がある層は、興味がない層に比べ、すべての項目において印象に残りやすいという結果になった。各項目の詳細を見ていくと、下図からわかることは大きく2点ある。

1点目は、印象への残りやすさと、展示の特性の比較である。防災に興味がある層が「非常に印象に残っている」と答えた人が半数程度のものに注目すると、「施設そのもの」(50.8%)や「被災当時の写真」(61.7%)など、災害そのものを直接想起させる展示が該当する。一方で、「非常に印象に残っている」が半数に届いていない項目に当たる、「被災前の日常風景の展示」(39.8%)や「語り部による講話」(35.0%)、「今後の災害に対する備えを促す展示」(31.0%)などは、災害そのものではなく、時系列的な変化を想起させるものや、ストーリー性のあるものになっている。

2点目は、防災に興味がない層についてである。「非常に印象に残っている」「やや印象に残っている」と答えた人が半数以上であるのは、「施設そのもの」(70.6%)「被災前の日常風景の展示」(59.5%)「被災当時の写真」(73.0%)「被災当時の映像」(69.9%)「被災した家具などの展示物」(60.7%)「被災した建物などの遺構」(67.0%)「施設周辺の風景」(59.1%)であった。防災に興味がない層であっても、被災そのものを直接的に示すものには印象に残りやすい。一方半数を切っているのは、「語り部による講話」(34.6%)と「今後の災害に対する備えを促す展示」(40.5%)である。これらについては、防災への興味がない層が一定数訪問者の中にいることを踏まえても、さらなる工夫を凝らし、より印象に残りやすい仕掛けを作っていくことが求められる。

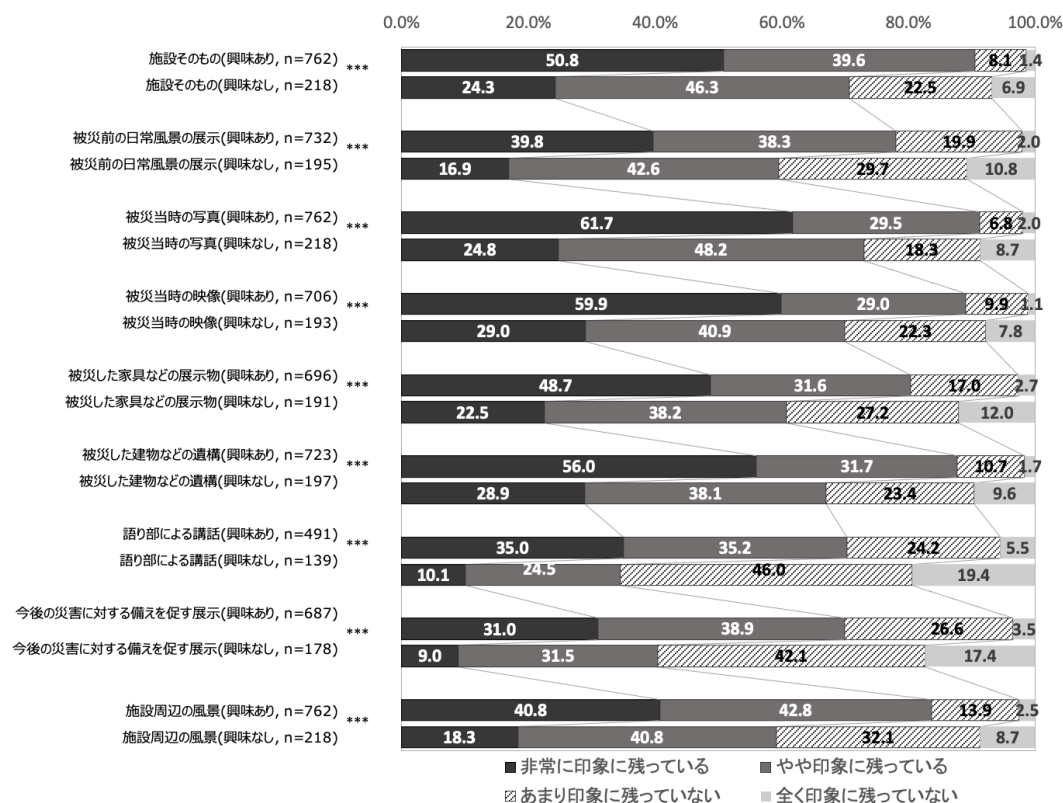


図 2.2.1 災害伝承施設を訪問して印象に残っていること (χ^2 検定、***: $p < 0.001$)

続いて、災害伝承施設を訪れたことで得た変化について聞いた。「あなたは、問1で答えた災害伝承施設へ訪問して以下のようなことを感じましたか。最も近いものを選んでください。」(問4)との文言とともに、前掲の質問と同様、感情に関わる5項目、態度変容に関わる5項目、否定的な効果4項目の計14項目を提示し、それぞれについて、「非常にあてはまる」～「全くあてはまらない」の4件法にて選択してもらった。結果、感情及び態度変容の計10項目について図2.2.2、否定的な4項目について図2.2.3を得た。

いずれの項目においても、 χ^2 検定の結果防災への興味の有無により有意な差が見られた。わかったことは大きく3点ある。

1点目は、概して防災への興味の有無により、訪問経験による変化には差があることである。防災への興味がある層は、そうでない層と比較して様々な変化が起こりやすい。

2点目は、単純な項目による差である。防災への興味がある層において「非常にあてはまる」が半数近くになったものは、「災害の悲惨さがわかった」(68.8%)「被害者がかわいそうだったと思った」(54.5%)「展示物を見て苦しい気持ちになった」(47.1%)という感情的な項目と、「災害に関する知識を得ることができた」(49.1%)「身の回りで災

害が起きたときのために備えておくべきだと思った」（48.3%）という得た知識を自分事としてどう活かすかという項目の2つである。

逆に、「学びたい内容を学べて満足した」（33.7%）という純粋な知的好奇心、「自分が被災者や被災地のためにできることを考えた」（37.3%）「災害伝承施設に訪問することを周りに勧めようと思った」（29.7%）という他者への貢献、「今後起こりうる災害についてもっと知りたいと思った」（37.4%）「同じような災害が身の回りで起こることを想像したくないと感じた」（38.6%）という具体的な想像という項目では、変化に少し結びつきづらい結果となった。感情的な変化や、それに伴う自分事化は進む一方で、自分の身の回りに置き換えた具体的な想像には少し結びつきづらく、ある種の「思考停止」とも表現できる状況に陥っている可能性は否定できない。

3つ目は、各項目についての防災への興味の有無による差（以後、割合の差を記述する際は、防災へ興味がある層/防災へ興味がない層、の順に記載する）である。「非常にあてはまる」「ややあてはまる」を肯定、「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」を否定として捉え、各項目において防災への興味の有無による差を比較した。20%近くの大きな差がある項目は、「学びたい内容を学べて満足した」（興味あり：86.1%/興味なし：63.8%）「自分が被災者や被災地のためにできることを考えた」（86.3%/58.3%）「身の回りで災害が起きたときのために備えておくべきだと思った」（91.3%/72.1%）「今後起こりうる災害についてもっと知りたいと思った」（88.3%/68.3%）「災害伝承施設に訪問することを周りに勧めようと思った」（73.4%/48.2%）の5項目で、「学びたい内容を学べて満足した」以外の4項目は、すべて行動変容の項目に該当する。つまり、防災への興味の有無により大きな差が生まれやすい点は行動変容についてであり、防災への興味がない人に対して、どのように行動変容を訴えていくかが課題であることが、本分析から浮き彫りになった。

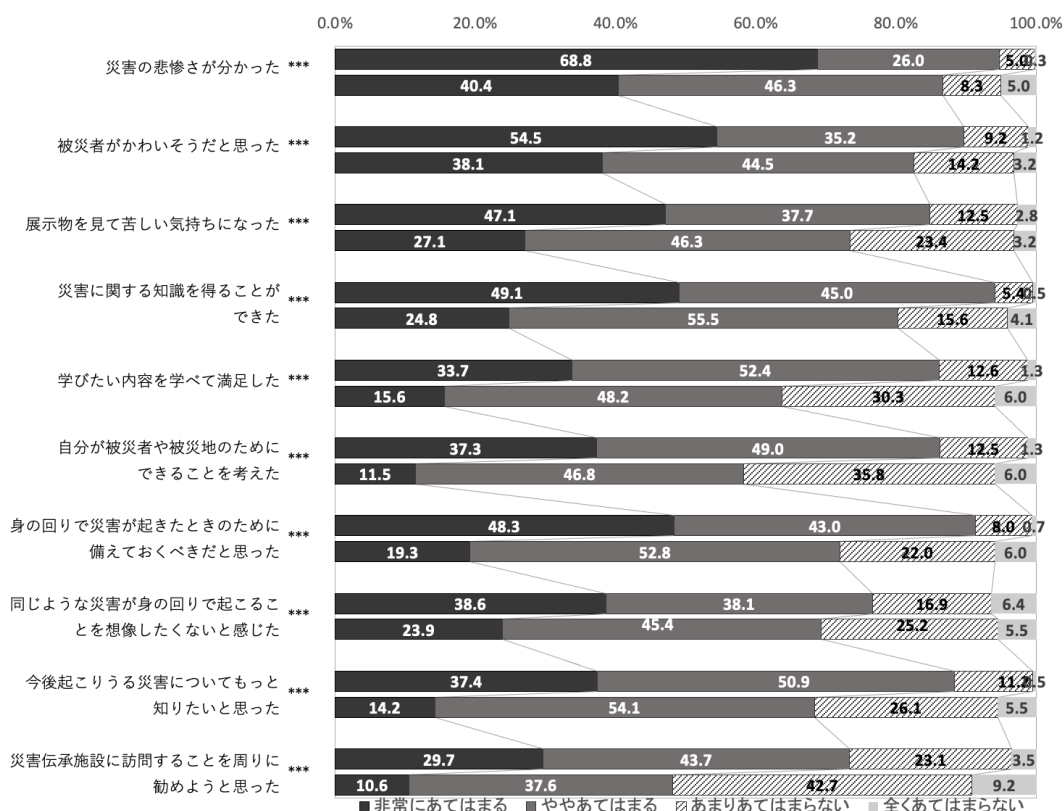


図 2.2.2 災害伝承施設を訪問して得た変化

(興味あり(上) : n=762、興味なし(下) : n=218、 χ^2 検定、*** : $p < 0.001$)

また、同じ質問である、「あなたは、問1で答えた災害伝承施設へ訪問して以下のようなことを感じましたか。最も近いものを選んでください。」(問4)について、否定的な4項目を図2.2.3にまとめた。結果として、否定的な項目に対し「非常にあてはまる」「ややあてはまる」と肯定的に返答した人が、「この災害伝承施設は来館者に何を伝えようとしているのか分からなかった」(興味あり: 32.7%/興味なし: 31.2%)のように、防災への興味を問わず一定数いることが示された。このことは、一定数災害伝承施設の展示やサービスを効果的に受容できていないことを示しており、災害伝承施設の展示やサービスについて、更なる洗練が求められる。

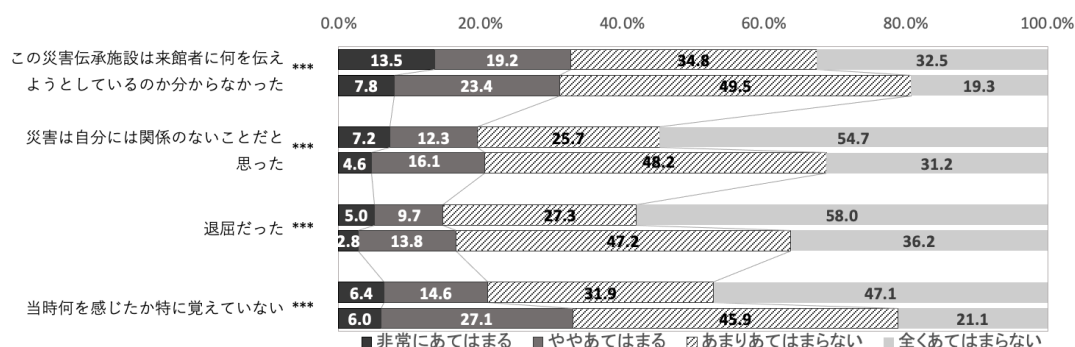


図 2.2.3 災害伝承施設を訪問して得た変化

(興味あり(上) : n=762、興味なし(下) : n=218、 χ^2 検定、*** : $p < 0.001$)

災害伝承施設への再訪問の動向について、「あなたは、問1で答えた災害伝承施設へ再び訪問したり、他の災害伝承施設へ訪問したりしましたか。」(問5)と聞いた。結果は図2.2.4の通りである。「訪問した」「訪問していないが、今後訪問しようと思っている」と再訪問への意向が窺えるような回答をした人について、 χ^2 検定の結果防災への興味の有無により有意な差(興味あり: 81.5%/興味なし: 46.3%)があることが示された。1度の訪問での学びや経験の質を高めることで防災への興味を生むこと、再訪問への仕掛けを講じること、この2つが求められる。

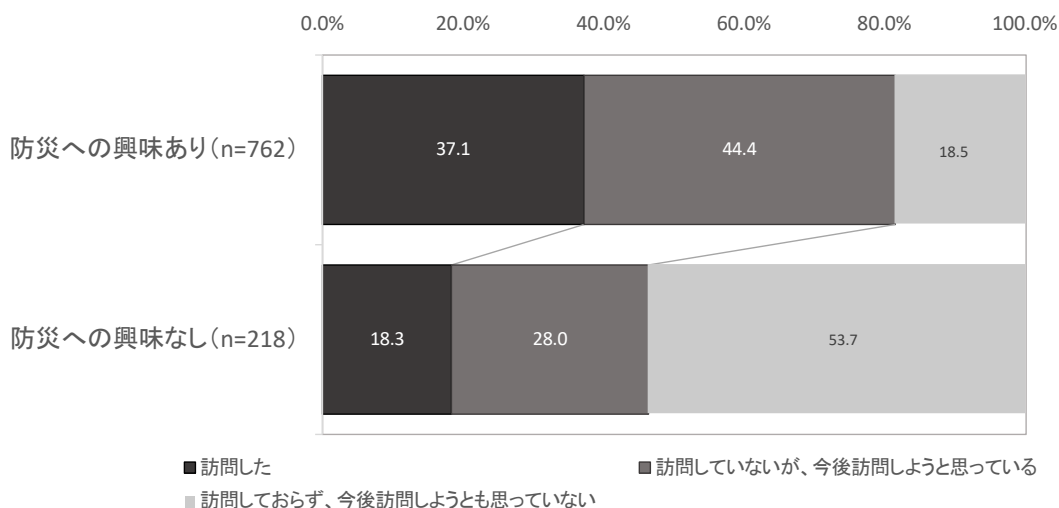


図 2.2.4 災害伝承施設を訪問後の再訪問の意向

(興味あり : n=762、興味なし : n=218、 χ^2 検定 : $p < 0.001$)

続いて、再訪問の理由について、「問5で「1. 訪問した」「2. 訪問していないが、今後訪問しようと思っている」とお答えした方に伺います。そう答えた理由として以下のことがあてはまりますか。それぞれの理由について最も近いものを選んでください。」（問6）と聞いた。12項目を提示しそれぞれについて他質問と同様、「非常にあてはまる」～「全くあてはまらない」の4件法で聞いた。結果は図2.2.5及び図2.2.6の通りである。

「たまたまその施設の近くを訪れたから」を除く11項目で、興味の有無により有意差が示された（ χ^2 検定の結果）ことから、該当の11項目では差がある一方、偶然性による訪問については、防災への興味の有無による差異がないことがわかる。また該当の11項目においては、どれも防災へ興味がある人ほど再訪問の理由になりやすいことが示された。

各項目で比較した際、防災への興味がある層であっても、「非常にあてはまる」「ややあてはまる」の割合が低くなる項目、すなわち訪問の理由として選択されづらい項目が、「自分の興味と合っていたから」（62.8%）「時間や費用がかかっても行きたいと思ったから」（69.6%）の2項目であった。逆に他項目は、防災や災害伝承施設への再訪問の意義の評価に関わるものであり、災害伝承施設を訪れ、防災意識を向上させ、自分事として今後の備えに結びつけたい、という思いがあることが窺える。しかし「自分の興味と合っていたから」訪問するというわけではなく、比較的義務的な訪問であり、また時間や費用などの労力を鑑みると再訪問への意欲が少し落ちてしまう。

防災への興味が乏しい層については、上記の2項目「自分の興味と合っていたから」（42.6%）「時間や費用がかかっても行きたいと思ったから」（42.6%）に加え、「辛い気持ちになっても訪問するべき」（48.6%）の項目が再訪問の理由として選択されづらい。このことは、防災への興味がない層が、防災の重要性は認識しつつも、辛さや労力など、何らかの負を味わってまで行くほどではない、という思いが窺える。

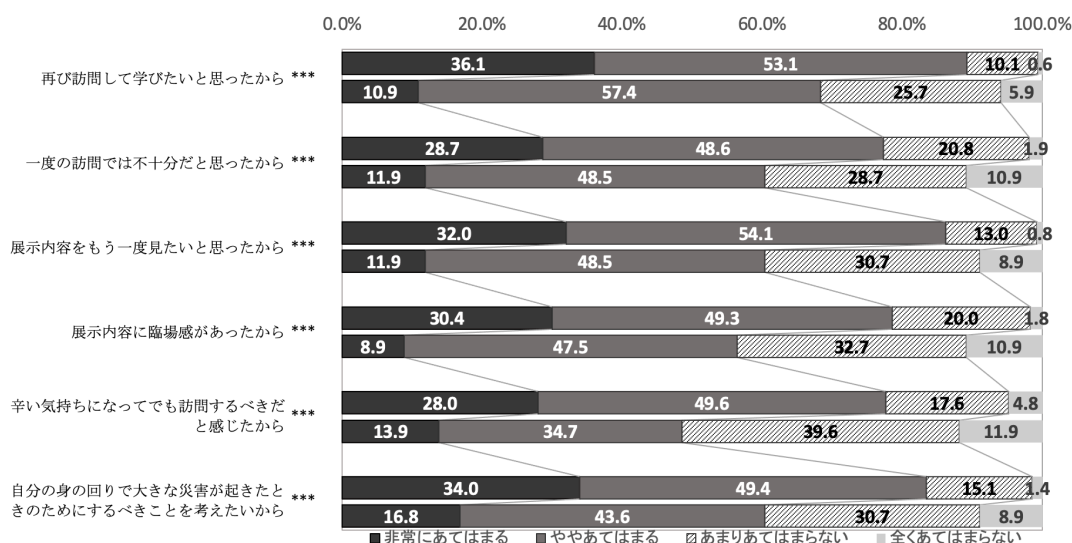


図 2.2.5 災害伝承施設を再訪問あるいは再訪問の意向の理由（前半）
 （興味あり（上）：n=621、興味なし（下）：n=101、 χ^2 検定、***：p<0.001）

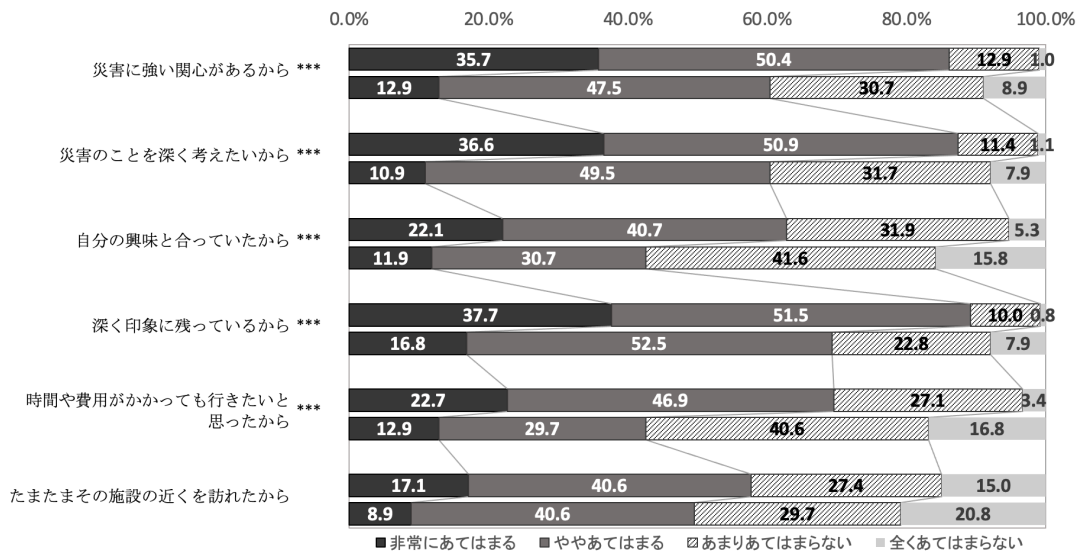


図 2.2.6 災害伝承施設を再訪問あるいは再訪問の意向の理由（後半）

（興味あり（上）：n=621、興味なし（下）：n=101

χ^2 検定、無印：有意差なし、*：p<0.05、**：p<0.01、***：p<0.001）

次いで、再訪問しない理由について、「問5で「3. 訪問しておらず、今後訪問しようとも思っていない」とお答えした方に伺います。そう答えた理由として以下のことがあてはまりますか。それぞれの理由について最も近いものを選んでください。」（問7）と聞いた。結果は、図 2.2.7 及び図 2.2.8 に示す。

防災への興味について、 χ^2 検定の結果有意差が示された項目は、「自分の身の回りで大きな災害が起こることはないと思っているから」「災害に強い関心がないから」「災害のことを深く考えたくないから」「自分の興味と合わなかったから」「特に印象に残らなかったから」「災害伝承施設のある地域周辺に、災害伝承施設以外の訪問したい場所がないから」の6項目であった。純粋な防災意識や災害への関心が比較的低いという理由だけでなく、災害伝承施設を訪問した過去の経験を鑑みて、もう一度災害伝承施設を訪問して更なる経験をしたい、と思えない状況にあることが窺える。加えて、その地域周辺に訪問したくなる施設を作ることは、防災への興味がない層だけでなく、防災への興味がある層についても、集客という観点からは重要な施策になり得る。

また、「一度の訪問で十分だと思ったから」（興味あり：17.0%/興味なし：25.6%）と答えた人が少ないことからわかる通り、決して一度の訪問で満足したから訪れないわけではないという点が非常に興味深い。防災への興味がある層だけでなく、防災への興味がない層であっても、災害伝承施設を訪問することの意味については十二分に認識している。展示内容と訪問者が求めるものに乖離があることや、災害について真剣に考えたくない

いうある種の自己防衛反応に近いものが働いていることなどから、施設を再訪問しない意向を示していることに留意する必要がある。

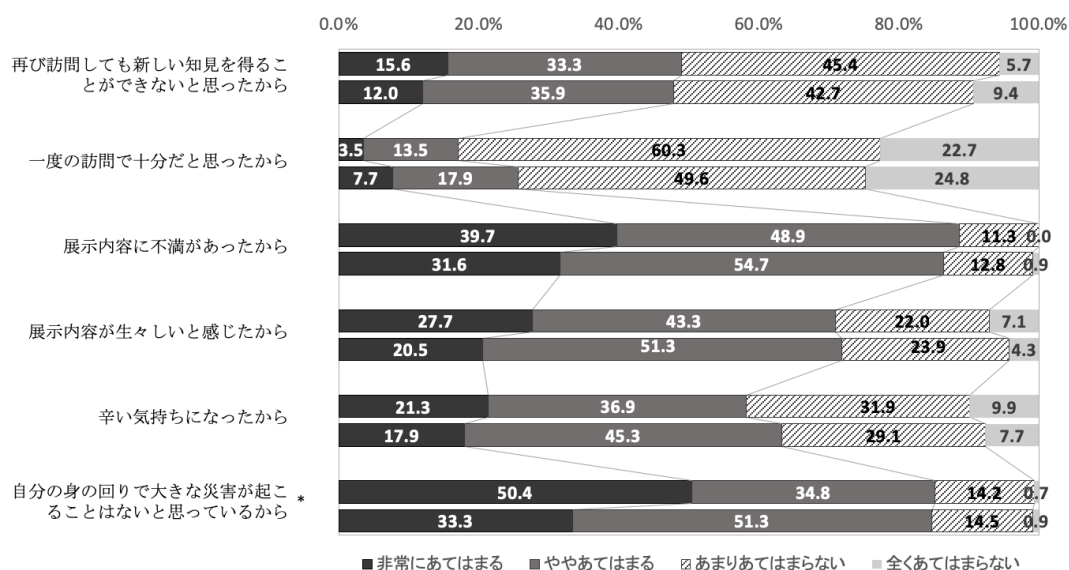


図 2.2.7 災害伝承施設を再訪問しない理由（前半）

（興味あり（上）：n=141、興味なし（下）：n=117

χ^2 検定、無印：有意差なし、*：p<0.05、**：p<0.01、***：p<0.001）

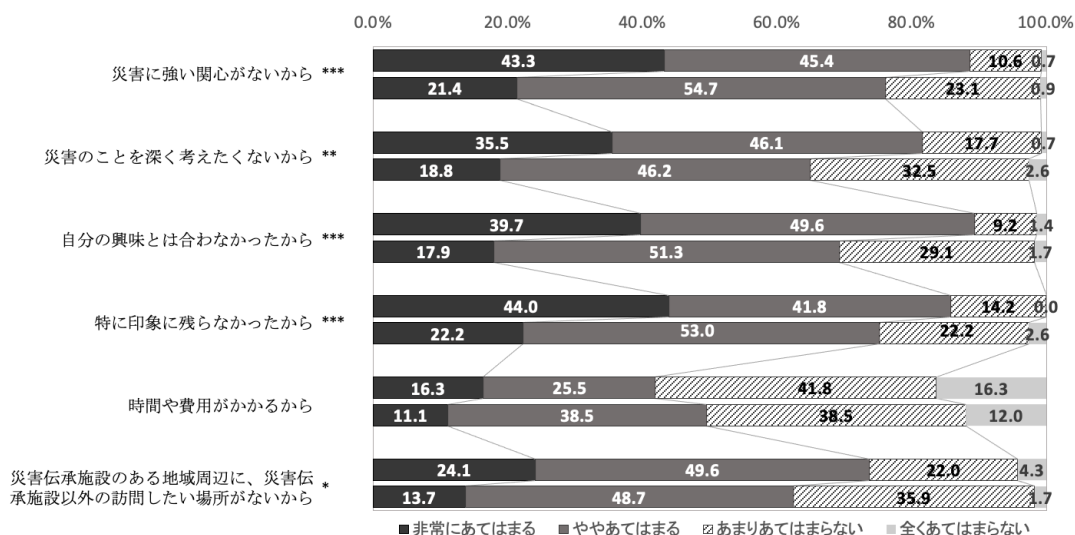


図 2.2.8 災害伝承施設を再訪問しない理由（後半）

（興味あり（上）：n=141、興味なし（下）：n=117

χ^2 検定、無印：有意差なし、*：p<0.05、**：p<0.01、***：p<0.001）

2.3 災害伝承施設への訪問経験の記憶

本節では、災害伝承施設へ訪問した経験を思い出すことがあるか、またそれはいつ想起されるか、を分析する。

まずは、災害伝承施設の記憶について、「前問の施設以外も含めて、あなたは訪問したことのある災害伝承施設のことを思い出しますか。」（問8）と聞いた。結果、図 2.3.1 のように、防災への興味の有無により、「はい」と答えた割合に差がある（興味あり：85.7% / 興味なし：61.5%）ことが示された（ χ^2 検定の結果）。防災へ興味がある方が、災害伝承施設への訪問経験のことを想起しやすい。ただ、防災への興味がなくても半数以上が経験を想起することがあるという事実は、想起させる仕掛けが機能しているということであり、本節ではその点を明らかにしていく。

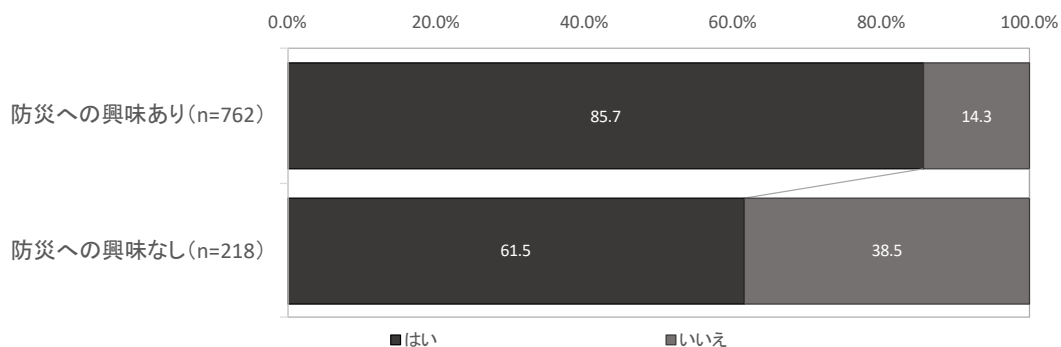


図 2.3.1 訪問したことがある災害伝承施設のことを思い出すか (χ^2 検定 : $p < 0.001$)

続いて、訪問経験を思い出す頻度について、「問 8 で「1. 思い出すことがある」と答えた方へ伺います。どれくらいの頻度で訪問経験を思い出しますか。※以下の中で最も近い頻度をお答えください。」（問 9）と聞いたところ、図 2.3.2 のようになった。防災への興味がある層は、73.4% もの人が「1 か月に 1 回程度」「1 年に 1 回程度」思い出すと答えたのに対し、防災への興味がない層は、44.1% と半数以下の人が「1 か月に 1 回程度」「1 年に 1 回程度」思い出すと答えており、防災への興味の有無により、思い出す頻度には有意差が見て取れる (χ^2 検定の結果)。加えて、防災への興味がある人たちであっても、訪問経験を思い出すことが「1 年に 1 回程度」という人が 55.0% と半数以上であることから、何らかの思い出すきっかけを作ることが重要であると考えられる。

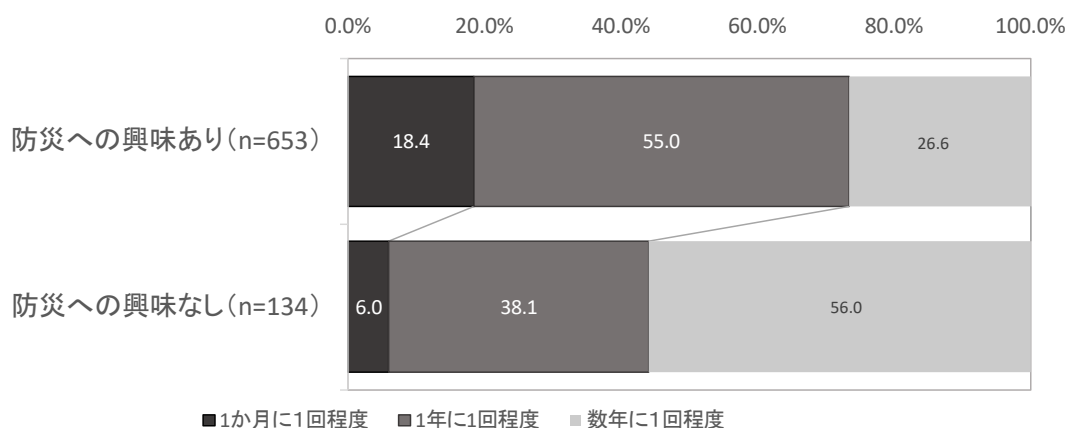


図 2.3.2 どれくらいの頻度で思い出すか (χ^2 検定 : $p < 0.001$)

次いで、災害伝承施設への訪問経験を思い出すきっかけについて、「問 8 で「1. 思い出すことがある」と答えた方へ伺います。訪問した記憶を思い出すきっかけは何ですか。あ

てはまるものすべてを選んでください。（いくつでも）」（問 10）と聞いた。結果得たのが図 2.3.3 である。思い出すきっかけとしての理由で上位に挙げられているものは、「災害から〇年などのニュースを見たとき」（興味あり：69.5%/興味なし：59.0%）「テレビやネットなどで災害について特集されているのを見たとき」（55.4%/45.5%）「災害が発生したニュースを見たとき」（57.6%/40.3%）と、どれもテレビやネットによる影響の項目であった。特に、周年放送や周年記事の力は強く、防災への興味がない層であっても、半分以上（59.0%）が訪問経験の記憶を想起している。

しかし、テレビやネットに関係ない項目については、訪問経験の記憶を呼び起こすきっかけにはなかなか得ないことも判明した。「自分で撮影した写真を見返したとき」（興味あり：22.2%/興味なし：14.2%）「被災地を訪れたとき」（31.4%/13.4%）「友人や家族と災害について話しているとき」（24.7%/12.7%）はテレビやネットに関係ない項目で、これらの項目については、「はい」の割合が低い。特に防災への興味がない層については、「はい」と答えた人が 15%以下と、きっかけになかなか得ていない。

このことから、ただ災害の記憶を風化させないだけでなく、災害伝承施設に訪問して受けた経験を風化させないためにも、テレビやネットなどでの周年放送・周年記事や、特集を組む意義が見えてくる。

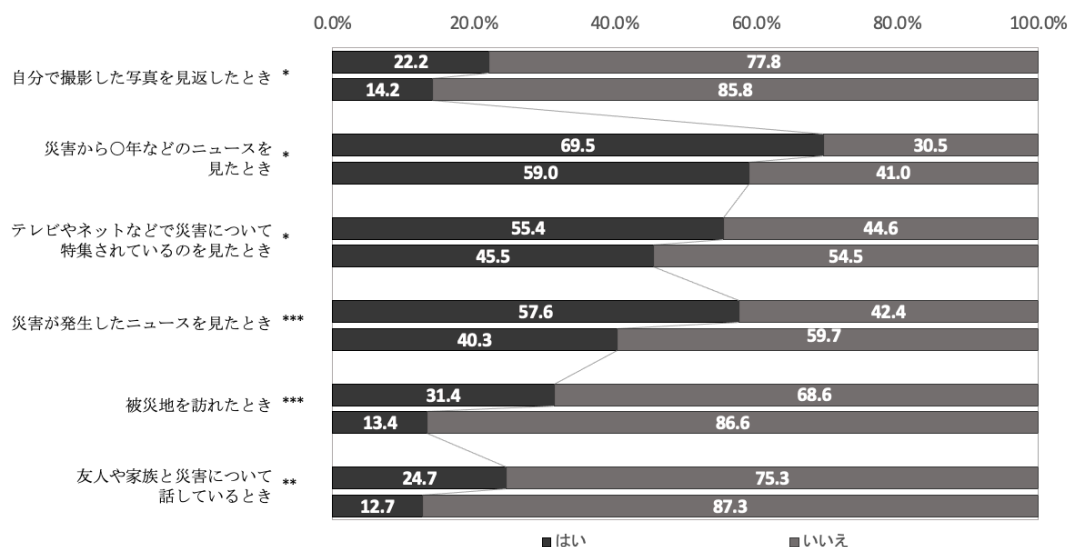


図 2.3.3 思い出すきっかけ

（興味あり（上）：n=653、興味なし（下）：n=134

χ^2 検定、無印：有意差なし、*：p<0.05、**：p<0.01、***：p<0.001)

2.4 訪問経験を他人に伝承するか

災害伝承とは、災害の経験や教訓を、人から人に受け継ぐ行為である。また災害伝承施設とは、当時の災害の経験を疑似体験し、教訓を学ぶ施設である。言い換えると、訪問者は擬似的にとはいえど、災害を経験し教訓を得ている。つまり訪問者が周囲の人に災害伝承施設で体験したことを伝えるという行為は、災害を疑似体験し教訓を得た人、すなわち訪問者が、得た災害の経験や教訓を、経験していない周囲の人に伝える行為、と言い換えることができる。ゆえに、この災害伝承施設への訪問者から、周囲の人への経験の共有という行為は、災害伝承行為と捉えることができる。この観点に立ち、防災への興味の有無が、他人に伝承する行為に関係しているかどうかを、本節では明らかにしていく。

まずは、他人に話したことがあるか、について、「あなたは災害伝承施設の訪問経験を、家族や友人などに話したことはありますか。」（問 13）と聞いた結果を図 2.4.1 に示す。結果として、「はい」と答えた、他人に話したことがあると答えた人の割合は、防災への興味の有無により有意差があった。防災への興味がある層は、75.6%と 4 人に 3 人は話したことがある、と答え、防災への興味がない層は、50.5%と半数近くも話したことがあると答えている。この結果は、程度の差こそあれど、防災への興味の有無問わず、災害の経験や教訓を継いでいく行為者になり得ることを示している。

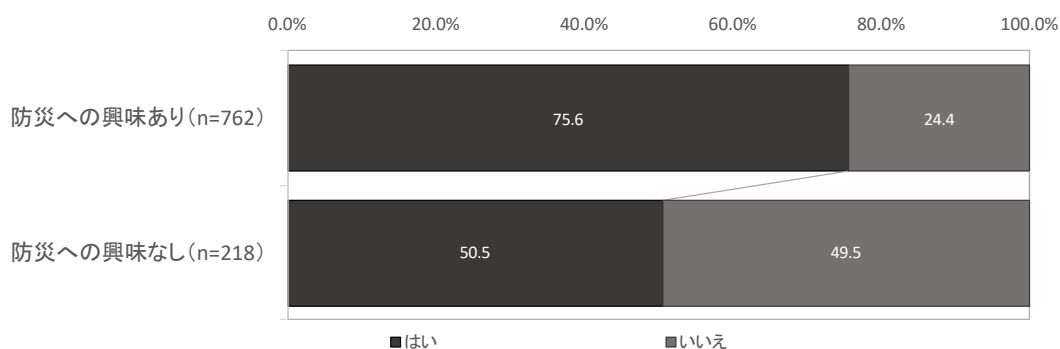


図 2.4.1 災害伝承施設への訪問経験を他人に話したことがあるか (χ^2 検定: $p < 0.001$)

家族や友人を災害伝承施設に連れて行きたいか、についても同様の結果が得られた。「あなたは災害伝承施設に家族や友人を連れていきたいと思いませんか。」（問 14）と聞いたところ、図 2.4.2 を得た。ただし、「はい」と答えた人が、防災へ興味がある層で 73.9%、防災へ興味がない層で 43.1%と、問 13 と比べ若干割合は減っている。特に防災への興味がない層にとって、家族や友人を災害伝承施設に連れて行きたいと思うことは、他人に話す行為よりもハードルが高い行為であることが示されている。これらの結果を踏まえ、訪問経験を他人に話したことがある理由・ない理由について、分析していく。

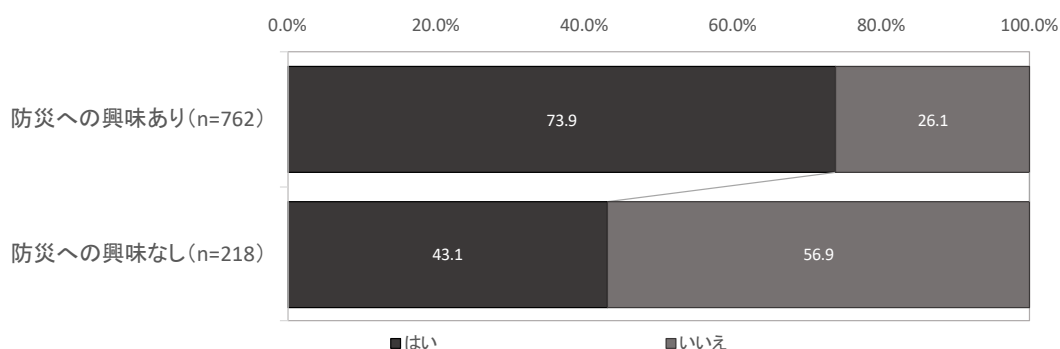


図 2.4.2 災害伝承施設に家族や友人を連れて行きたいか (χ^2 検定: $p < 0.001$)

まずは、他人に話したことがある理由について、「問 13 で災害伝承施設の訪問経験を、家族や友人などに話したことがあると答えた方へ伺います。周囲に話した理由として以下のものはあてはまりますか。それぞれの理由について最も近いものを選んでください。」(問 15) と聞いたところ、図 2.4.3 の結果が得られた。

防災への興味がない層であっても、「非常にあてはまる」「ややあてはまる」の肯定的な答えが多い、「災害伝承施設へ訪問したことで心を動かされたから」(興味あり: 93.2% / 興味なし: 72.8%) 「災害伝承施設を訪問したことで得た知識を共有するべきだと思ったから」(90.8%/79.1%) 「災害を伝えることが大事だと思ったから」(92.2%/79.1%) の3項目は、災害伝承の存在意義そのものと言っても差し支えないだろう。災害伝承施設を訪問した人が心を動かされ、その経験や得た教訓を、「共有するべき」「伝えることが大事だ」と思い、他人に伝えることで、災害伝承の裾野を広げていく。結果、防災意識が少しでも高い人を増やすことに寄与できる。

一方で、防災への興味の有無により、肯定的に答えた人の割合の差が大きい「話した相手が興味を持つと思ったから」(72.7%/52.7%) 「話した相手にも災害伝承施設を訪問してほしいと思ったから」(76.1%/50.9%) 「話した相手に、防災に興味を持ってほしいと思ったから」(85.1%/64.6%) の3項目は、経験や教訓を伝えることで、伝えた相手の行動変容を促すことが目的となっている。防災に興味がある層にとっては、話した相手に対し、防災に興味を持ってもらい、災害伝承施設を訪れてもらうことで、防災への意識を高めてほしいという思いがあると推察される。一方で、防災への興味が乏しい層にとっては、そういった防災への意識を高く持ってもらいたいという思いが比較的薄いため、「相手の行動変容を促すために」という思いを抱きづらい。

また1つ興味深いのは、「特に話した理由はなく、なんとなく話した」という理由に肯定的な回答を示した人数の割合について、防災への興味がある人(40.8%)より、興味が

ない人（46.3％）の方が多くなり、他項目と違い逆転現象が発生している点である。このことは、災害の経験や教訓を伝える、という災害伝承の行為をコミュニケーションの枠組みで捉えるべき、という示唆を与えている。防災への興味が乏しい層にとって、災害伝承施設を訪れた経験は、防災や命の安全など何らかの特殊な文脈を考慮して話すべきだと思う経験ではない。純粋に話のタネとして認識している。災害という特殊な文脈に囚われすぎないことが求められている。

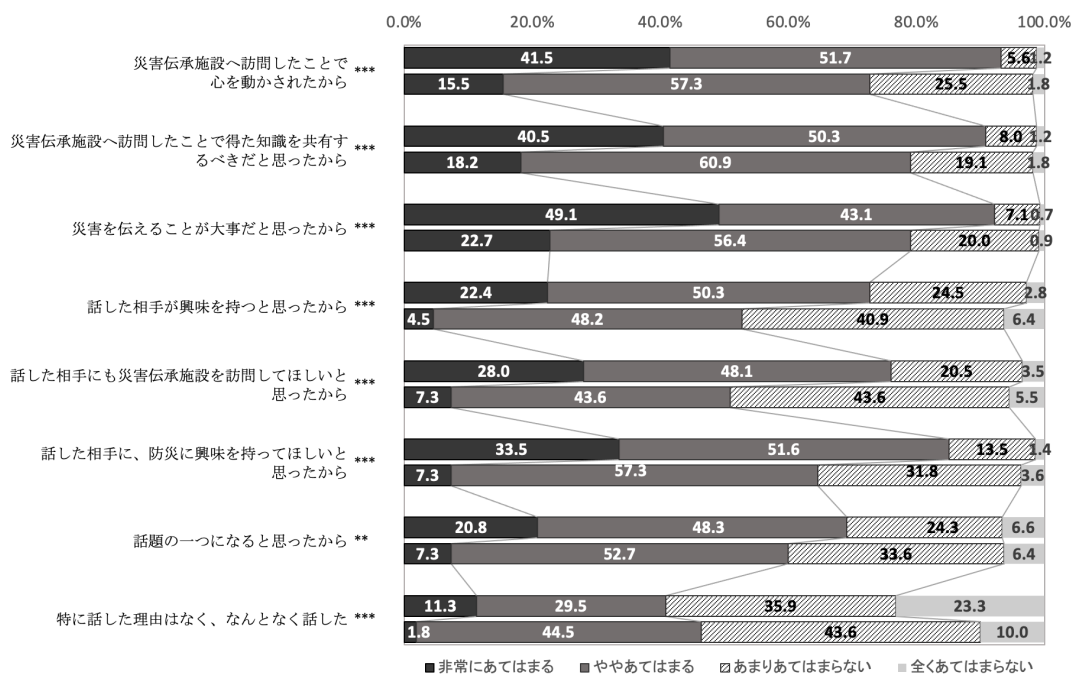


図 2.4.3 災害伝承施設への訪問経験を友人や家族に話した理由

(興味あり (上) : n=576、興味なし (下) : n=110

χ^2 検定、** : $p < 0.01$ 、*** : $p < 0.001$)

続いて、訪問経験を周囲に話していない理由について、「問 13 で災害伝承施設の訪問経験を、家族や友人などに話したことはない」と答えた方へ伺います。周囲に話さなかった理由として以下のものはあてはまりますか。それぞれの理由について、最も近いものを選んでください。」(問 16) と問い、分析結果を図 2.4.4 に示す。 χ^2 検定を実施したが、防災への興味の有無による有意差は存在しなかった。そのため、本設問については、防災への興味の有無には着目せず、項目間での比較に留める。

他項目と比べ、肯定的な答えの割合が低いのは、「そもそも訪問経験を他者に伝えるという発想にならなかったから」(興味あり : 40.8% / 41.6%) という理由である。すなわち、

訪問経験を他者に伝えるという発想自体は持っているものの、他の理由から他者に伝えられていない現状が推察される。

逆に他項目と比べ肯定的な答えの割合が高いのは、「訪問経験が印象に残らなかったから」（79.1%/70.4%）という理由である。訪問経験のインパクトが小さく、話すに値しないと判断する人が、防災への興味問わず多いという事実は、災害伝承施設側の質向上により解決すべき問題である。

他項目について見てみると、「訪問して感じたことを伝えたいと思ったことがなかったから」（64.5%/55.6%）「訪問して感じたことは多くあったが、何を伝えるべきか分からなかったから」（48.9%/56.6%）のように、コミュニケーションの枠組みでの問題もある。災害伝承施設側が、訪問者から周囲他者への話についても災害伝承行為と捉え、どのような仕掛けを施せば周囲他者への話が促進されるか、という仕掛けを施すべき余地がある。加えて、「訪問して苦しくなった気持ちを思い出したくなかったから」（65.0%/63.9%）という心理的負担の重さ、「聞いた相手が暗い気持ちになると思ったから」（59.7%/55.6%）という相手への思いやりなどの、災害の経験をコミュニケーションの1つの話題として扱うが故の難しさが、他者に話す際のハードルになっているという事実も見えてくる。

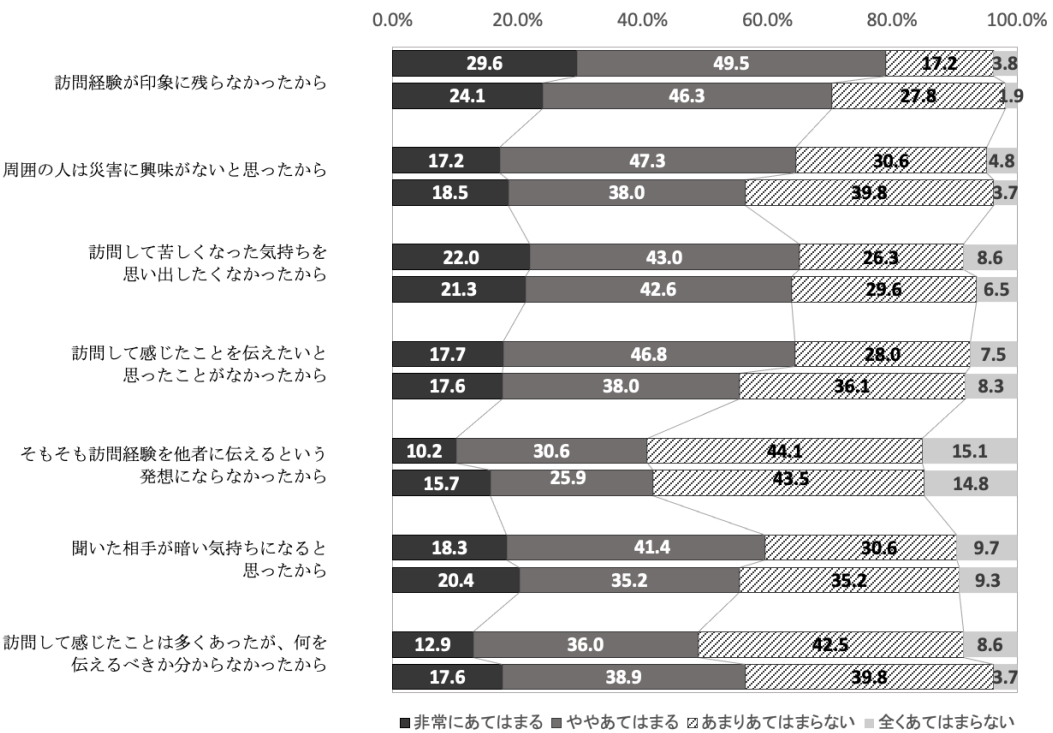


図 2.4.4 災害伝承施設への訪問経験を友人や家族に話していない理由
(興味あり (上) : n=186、興味なし (下) : n=108、 χ^2 検定 : n. s.)

3. まとめ

東北地方太平洋沖地震という未曾有の大災害から 14 年が経とうとしている中で、災害を風化させないためにも災害の記憶や教訓を後世に伝える災害伝承という行為が改めて注目されている。また南海トラフ地震や首都直下地震など、今後も甚大な災害を被ることが予想される中で、市民それぞれが防災意識を高める必要がある。そういった潮流の中で、災害伝承の受け手は、防災への興味がある層から防災への興味がない層へと、対象を拡大させつつある。

この変化を踏まえ、防災への興味の有無について、災害伝承施設への訪問で受ける効果やその後の行動の差を見ることで、改めてあるべき災害伝承についての示唆を与えることが本研究の目的であった。本研究を通じ、防災への興味がないものの災害伝承施設を訪れる人の存在が実際に示され、防災への興味の有無により災害伝承施設から受ける効果が異なることが判明した。

得られた結果としては、大きく 2 点ある。災害伝承施設を訪れたことで受ける効果について、災害の悲惨さなど感情面での認知が進み、災害を自分にも起こり得るものだと捉えるようになるという点で災害伝承としては一定の役割を果たしている。しかしながら、それを実際に身の回りに置き換えてみるという具体的な想像には結びつきづらい、という点で、災害伝承施設には効果を最大化する余地がまだあることが示された。また防災への興味が乏しい層については、災害伝承施設を訪れたとしても、行動変容にまでは届かないという点も、1 つの課題として本調査で示した結果となる。

2 点目は、周囲他者に災害伝承を継いでいくという行為に関する結果である。災害伝承を受ける人を増やしていくためには、災害伝承施設を訪れた人が周囲に話をし、時には実際に連れていくなど、周囲他者を巻き込んでいく必要がある。しかしその際、災害伝承とは人と人の間で行われるコミュニケーション活動である、という姿勢を忘れてはならないことが、本研究の結果から示唆された。災害伝承施設側の工夫として、何をどう伝えるべきかを明示した方がいいのか、あるいは何らかの展示に関する更なる工夫を施して印象に残りやすくするのか。具体的な手法については今後の研究の課題とさせていただくが、災害伝承を広げていくためにも、考えるべき重要な問題である。

引用・参考文献

- 国土交通省（2021）「国土交通白書 2021 第2節 過去の危機と変化3 東日本大震災」 <https://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/r02/hakusho/r03/html/n1123000.html>, 2024年1月27日
- 災害伝承普及協会（n.d.）「災害伝承とは」 https://husegu.com/landing/tradition_basic/about_disaster_folklore/, 2024年1月28日
- 3.11 伝承ロード推進機構（2024）「震災伝承施設」の登録状況 令和6年8月29日時点」 <https://www.thr.mlit.go.jp/shinsaidensho/ichiran240829.pdf>, 2024年2月14日
- 総務省（2024）「地域における住民の防災意識の向上（災害教訓の伝承）に関する調査の結果」 https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/hyouka/hyouka_kansi_n/ketsuka_nendo/hyouka_240829000175924.html, 2024年1月27日
- 内閣府（2005）「過去の災害に学ぶ（特別編）津波と稲むらの火」 https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/pdf/kouhou026_14-15.pdf
- 内閣府（2014）「平成26年版 防災白書 | 特集 第5章 1 「公助の限界」と自助・共助による「ソフトパワー」の重要性」 https://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h26/honbun/0b_5s_01_00.html, 2024年1月27日
- 宮古市災害資料アーカイブ（n.d.）「昭和三陸地震津波、チリ地震津波【4】重茂姉吉地区の教訓「ここより下に家を建てるな」」 <https://miyako-archive.irides.tohoku.ac.jp/tatakai/showasanriku/4/>, 2024年1月28日

付属資料（アンケート調査の単純集計）

スクリーニング調査

問1 あなたは、過去の災害（たとえば、東日本大震災や関東大震災）に関する展示をしている災害伝承施設を訪問したことはありますか。（〇は1つ） N=980

1. はい	100%
2. いいえ	0%

問2 あなたは災害伝承施設に、のべ何回訪問したことがありますか。（〇は1つ） N=980

1. 1回	50.1%
2. 5回	24.7%
3. 6回	3.7%
4. 7回	0.8%
5. 8回	0.4%
6. 9回	0.1%
7. 10回以上	20.2%

本調査

問1 あなたがはじめて訪問した災害伝承施設の名称と場所をお答えください。 N=980

1. 名称（自由記述）	略
2. 市町村（自由記述）	略

附問1-1 あなたがその施設を訪問したのはいつ頃ですか。大体で構わないので教えてください。（半角数字でご記入ください） N=980

略

問2 あなたが問1で答えた災害伝承施設へ訪問した理由は何ですか。それぞれあてはまるものを選んでください。 N=980

	はい	いいえ
1 学校行事（修学旅行、校外学習等）の行程だったから	11.7%	88.3%
2 家族・友人に誘われたから	24.0%	76.0%
3 たまたまその施設の近くを訪れたから	54.7%	45.3%
4 その施設がある地域に興味があったから	55.7%	44.3%
5 防災に関心があったから	58.3%	41.7%
6 施設で扱われている災害について詳しく知りたかったから	58.9%	41.1%
7 災害伝承に興味があったから	59.7%	40.3%
8 博物館や美術館を訪問することが好きだから	42.9%	57.1%

問3 あなたが問1で答えた災害伝承施設へ訪問して見たものや聞いたもののうち、以下のものはどれくらい印象に残っていますか。最も近いものを選んでください。 N=980

		非常に印象に残っている	やや印象に残っている	あまり印象に残っていない	全く印象に残っていない	展示されていなかった	開催されていなかった
1	施設そのもの	44.9%	41.1%	11.3%	2.7%	0.0%	0.0%
2	被災前の日常風景の展示	33.1%	37.0%	20.8%	3.7%	5.4%	0.0%
3	被災当時の写真	53.5%	33.7%	9.4%	3.5%	0.0%	0.0%
4	被災当時の映像	48.9%	29.0%	11.5%	2.3%	8.3%	0.0%
5	被災した家具などの展示物	39.0%	29.9%	17.3%	4.3%	9.5%	0.0%
6	被災した建物などの遺構	47.1%	31.0%	12.6%	3.2%	6.1%	0.0%
7	語り部による講話	19.0%	21.1%	18.7%	5.5%	0.0%	35.7%
8	今後の災害に対する備えを促す展示	23.4%	33.0%	26.3%	5.6%	11.7%	0.0%
9	施設周辺の風景	35.8%	42.3%	18.0%	3.9%	0.0%	0.0%

問4 あなたは、問1で答えた災害伝承施設へ訪問して以下のようなことを感じましたか。最も近いものを選んでください。N=980

		非常にあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1	災害の悲惨さが分かった	62.4%	30.5%	5.7%	1.3%
2	被災者がかわいそうだと思った	50.8%	37.2%	10.3%	1.6%
3	展示物を見て苦しい気持ちになった	42.7%	39.6%	14.9%	2.9%
4	災害に関する知識を得ることができた	43.7%	47.3%	7.7%	1.3%
5	学びたい内容を学べて満足した	29.7%	51.4%	16.5%	2.3%
6	自分が被災者や被災地のためにできることを考えた	31.5%	48.5%	17.7%	2.3%
7	自分の身の回りで災害が起きたときのために備えておくべきだと思った	41.8%	45.2%	11.1%	1.8%
8	同じような災害が自分の身の回りで起こることを想像したくないと感じた	35.3%	39.7%	18.8%	6.2%
9	今後起こりうる災害についてもっと知りたいと思った	32.2%	51.6%	14.5%	1.6%
10	災害伝承施設に訪問することを周りに勧めようと思った	25.4%	42.3%	27.4%	4.8%
11	この災害伝承施設は来館者に何を伝えようとしているのか分からなかった	12.2%	20.1%	38.1%	29.6%
12	災害は自分には関係のないことだと思った	6.6%	13.2%	30.7%	49.5%
13	退屈だった	4.5%	10.6%	31.7%	53.2%
14	当時何を感じたか特に覚えていない	6.3%	17.3%	35.0%	41.3%

問5 あなたは、問1で答えた災害伝承施設へ再び訪問したり、他の災害伝承施設へ訪問したりしましたか。N=980

1. 訪問した	33.0%
2. 訪問していないが、今後訪問しようと思っている	40.7%
3. 訪問しておらず、今後訪問しようとも思っていない	26.3%

問6 問5で「1. 訪問した」「2. 訪問していないが、今後訪問しようと思っている」とお答えした方に伺います。そう答えた理由として以下のことがあてはまりますか。それぞれの理由について最も近いものを選んでください。N=722

		非常にあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1	再び訪問して学びたいと思ったから	32.5%	53.7%	12.3%	1.4%
2	一度の訪問では不十分だったから	26.3%	48.6%	21.9%	3.2%
3	展示内容をもう一度見たいと思ったから	29.2%	53.3%	15.5%	1.9%
4	展示内容に臨場感があったから	26.2%	49.0%	21.7%	3.0%
5	辛い気持ちになってでも訪問するべきだと感じたから	26.0%	47.5%	20.6%	5.8%
6	自分の身の回りで大きな災害が起きたときのためにするべきことを考えたいから	31.6%	48.6%	17.3%	2.5%
7	災害に強い関心があるから	32.5%	50.0%	15.4%	2.1%
8	災害のことを深く考えたいから	33.0%	50.7%	14.3%	2.1%
9	自分の興味と合っていたから	20.6%	39.3%	33.2%	6.8%
10	深く印象に残っているから	34.8%	51.7%	11.8%	1.8%
11	時間や費用がかかっても行きたいと思ったから	21.3%	44.5%	28.9%	5.3%
12	たまたまその施設の近くを訪れたから	15.9%	40.6%	27.7%	15.8%

問7 問5で「3. 訪問しておらず、今後訪問しようとも思っていない」とお答えした方に伺います。そう答えた理由として以下のことがあてはまりますか。それぞれの理由について最も近いものを選んでください。N=258

		非常にあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1	再び訪問しても新しい知見を得ることができないと思ったから	7.4%	44.2%	34.5%	14.0%
2	一度の訪問で十分だったから	23.6%	55.4%	15.5%	5.4%
3	展示内容に不満があったから	0.4%	12.0%	51.6%	36.0%
4	展示内容が生々しいと感じたから	5.8%	22.9%	46.9%	24.4%
5	辛い気持ちになったから	8.9%	30.6%	40.7%	19.8%
6	自分の身の回りで大きな災害が起こることはないと思っているから	0.8%	14.3%	42.2%	42.6%
7	災害に強い関心がないから	0.8%	16.3%	49.6%	33.3%
8	災害のことを深く考えたくないから	1.6%	24.4%	46.1%	27.9%
9	自分の興味とは合わなかったから	1.6%	18.2%	50.4%	29.8%
10	特に印象に残らなかったから	1.2%	17.8%	46.9%	34.1%
11	時間や費用がかかるから	14.3%	40.3%	31.4%	14.0%
12	災害伝承施設のある地域周辺に、災害伝承施設以外の訪問したい場所がないから	3.1%	28.3%	49.2%	19.4%

問8 前問の施設以外も含めて、あなたは訪問したことのある災害伝承施設のことを思い出しますか。N=980

1. 思い出すことがある	80.3%
2. 思い出すことはない	19.7%

問9 問8で「1. 思い出すことがある」と答えた方へ伺います。どれくらいの頻度で訪問経験を思い出しますか。※以下の中で最も近い頻度をお答えください。N=980

1. 1か月に1回程度	16.3%
2. 1年に1回程度	52.1%
3. 数年に1回程度	31.6%

問 1 0 問 8 で「1. 思い出すことがある」と答えた方へ伺います。訪問した記憶を思い出すきっかけは何ですか。あてはまるものすべてを選んでください。（いくつでも）。N=980

1. 自分で撮影した写真を見返したとき	20.8%
2. 災害から〇年などのニュースを見たとき	67.7%
3. テレビやネットなどで災害について特集されているのを見たとき	53.7%
4. 災害が発生したニュースを見たとき	54.6%
5. 被災地を訪れたとき	28.3%
6. 友人や家族と災害について話しているとき	22.6%
7. その他：	2.4%

問 1 1 あなたは直近でいつ災害伝承施設へ訪問しましたか。もっともあてはまるもの 1 つを選んでください。N=980

1. 1か月以内	7.4%
2. 半年以内	19.2%
3. 1年以内	17.6%
4. 1年半以内	6.8%
5. 2年以内	7.7%
6. 2年半以内	1.9%
7. 3年以内	9.0%
8. 3年より前	30.3%

問 1 2 あなたは災害伝承施設を何か所訪問したことがありますか。（半角数字でご記入ください）。N=980

略

問 1 3 あなたは災害伝承施設の訪問経験を、家族や友人などに話したことはありますか。N=980

1. 話したことがある	70.0%
2. 話したことはない	30.0%

問 1 4 あなたは災害伝承施設に家族や友人を連れていきたいと思いますか。N=980

1. 連れて行きたいと思う	67.0%
2. 連れて行きたいとは思わない	33.0%

問 1 5 問 1 3で災害伝承施設の訪問経験を、家族や友人などに話したことがあると答えた方へ伺います。周囲に話した理由として以下のものはあてはまりますか。それぞれの理由について最も近いものを選んでください。N=686

		非常にあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1	災害伝承施設へ訪問したことで心を動かされたから	37.3%	52.6%	8.7%	1.3%
2	災害伝承施設へ訪問したことで得た知識を共有するべきだと思ったから	36.9%	52.0%	9.8%	1.3%
3	災害を伝えることが大事だと思ったから	44.9%	45.2%	9.2%	0.7%
4	話した相手が興味を持つと思ったから	19.5%	50.0%	27.1%	3.4%
5	話した相手にも災害伝承施設を訪問してほしいと思ったから	24.6%	47.4%	24.2%	3.8%
6	話した相手に、防災に興味を持ってほしいと思ったから	29.3%	52.5%	16.5%	1.7%
7	話題の一つになると思ったから	18.7%	49.0%	25.8%	6.6%
8	特に話した理由はなく、なんとなく話した	9.8%	31.9%	37.2%	21.1%

問 1 6 問 1 3で災害伝承施設の訪問経験を、家族や友人などに話したことはないと答えた方へ伺います。周囲に話さなかった理由として以下のものはあてはまりますか。それぞれの理由について、最も近いものを選んでください。N=294

		非常にあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1	訪問経験が印象に残らなかったから	3.1%	21.1%	48.3%	27.6%
2	周囲の人は災害に興味がないと思ったから	4.4%	34.0%	43.9%	17.7%
3	訪問して苦しくなった気持ちを思い出したくなかったから	7.8%	27.6%	42.9%	21.8%
4	訪問して感じたことを伝えたいと思ったことがなかったから	7.8%	31.0%	43.5%	17.7%
5	そもそも訪問経験を他者に伝えるという発想にならなかったから	15.0%	43.9%	28.9%	12.2%
6	聞いた相手が暗い気持ちになると思ったから	9.5%	32.3%	39.1%	19.0%
7	訪問して感じたことは多くあったが、何を伝えるべきか分からなかったから	6.8%	41.5%	37.1%	14.6%

問 1 7 あなたは今まで大きな災害を経験したことはありますか。それぞれについて、一つずつお答えください。N=980

		避難したことがある	避難していないが経験したことがある	経験したことがない
1	地震	28.0%	48.6%	23.5%
2	津波	7.1%	9.2%	83.7%
3	火山噴火	1.8%	8.5%	89.7%
4	水害	10.9%	28.7%	60.4%

属性 (n=980)

問 性別

男性	75.7%
女性	24.3%

問 年齢

10代	0.2%
20代	3.5%
30代	10.7%
40代	20.3%
50代	29.9%
60代	28.5%
70代	6.9%

問 都道府県

北海道	4.1%
青森県	0.9%
岩手県	2.4%
宮城県	6.0%
秋田県	0.4%
山形県	0.8%
福島県	2.1%
茨城県	1.8%
栃木県	0.9%
群馬県	0.6%
埼玉県	5.7%
千葉県	4.6%
東京都	14.3%
神奈川県	7.4%
新潟県	1.4%
富山県	0.6%
石川県	0.5%
福井県	0.3%
山梨県	0.4%
長野県	1.3%
岐阜県	1.2%
静岡県	1.6%
愛知県	6.1%
三重県	1.3%
滋賀県	1.0%
京都府	1.3%
大阪府	8.0%
兵庫県	9.1%

奈良県	1.4%
和歌山県	0.7%
鳥取県	0.4%
島根県	0.2%
岡山県	0.4%
広島県	1.8%
山口県	0.7%
徳島県	0.4%
香川県	0.4%
愛媛県	0.2%
高知県	0.4%
福岡県	2.1%
佐賀県	0.1%
長崎県	1.3%
熊本県	1.5%
大分県	0.4%
宮崎県	0.2%
鹿児島県	0.1%
沖縄県	0.5%
国外	0.0%

問 未既婚

既婚	75.4%
未婚	24.6%

問 子供

あり	69.5%
なし	30.5%

問 職種

営業・販売	10.1%
研究・開発・技術者	8.9%
総務・人事	1.8%
財務・経理	1.4%
企画・マーケティング	0.6%
広報・広告・デザイン	0.6%
事務職	6.6%
管理職	7.0%
会社経営・役員	4.0%
公務員・団体職員	10.4%
教職員	3.7%
専門職(医師・看護師・弁護士など)	5.2%
自由業	1.7%
自営業	5.0%

パート・アルバイト	8.0%
契約社員・派遣社員	4.2%
専業主婦（主夫）	5.6%
無職	11.6%
小学生	0.0%
中学生	0.0%
高校生	0.1%
短大・専門学校生	0.1%
大学生	0.4%
大学院生	0.0%
その他	2.9%

問 同居家族

0 人	12.0%
1 人	28.6%
2 人	26.3%
3 人	20.9%
4 人	7.6%
5 人	3.3%
6 人	0.7%
7 人以上	0.6%

問 最終学歴

中学校卒	0.9%
高校卒	21.3%
専門学校卒	9.3%
短大・高専卒	6.2%
大学卒	53.5%
大学院卒	7.7%
在学中	0.6%
その他	0.5%

問 世帯年収

～400 万円	25.0%
401 万円～600 万円	23.6%
601 万円～800 万円	18.0%
801 万円～1000 万円	14.7%
1001 万円～1200 万円	10.2%
1201 万円～1500 万円	5.5%
1501 万円以上	3.1%

問 住居形態

持ち家・一戸建て	53.5%
持ち家・マンション	19.1%
賃貸・一戸建て	2.8%
賃貸・マンション、アパート	20.9%
寮・社宅	3.0%
その他	0.8%

問 運転免許の所持

はい	94.1%
いいえ	5.9%

問 自家用車の所有

本人が所有	70.0%
家族が所有	14.8%
所有していない	15.2%